
遠い日の花火

長月 タ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い日の花火

【Nコード】

N0683A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

遠い日の花火は雨ににじみ、思い出とともに朽ちる。

雨が車窓をすりすりすると逃げていく。その隙間を流れる景色を見ながら、私はそれを何度も過去とダブらせていた。

「どうした？」

「この辺もよくドライブしたなあと思って……」

そういえば、あの雨の日。大きな水溜りがあったのでゆっくり走っていたんだけど、気が付いたら車のバンパーの下部分がこつそりなくなっていたのだ。おそらく水の抵抗に負けたのだろう。地を這うような低い車だから、ありえないこともない。降りしきる雨の中で、がっかりと肩を落とした彼の姿は、今となっては笑い話だ。次の日、水溜りのあったその道路の片隅にそれは落ちていた。いろんな車に轢かれてぼろぼろになつて。

「そうだな、そんなこともあったな」

彼は口元だけでふつと笑った。

思えば、車の中で付き合う事を決めた私たちは、思い出という思い出がすべて車の中だった。

休みになれば、二人でいろんなところへ出かけたものだ。とても、幸せな日々だった。

こういう日が来ると、知ってはいたけれど。

「何か飲む？」

と彼が聞く。

「いない」

と私は答える。しばらく静かにしていたかった。

夏には6時間かけて、日帰りで新潟に行くなんて無茶もやったな。車のライトを消したら天地もわからない暗闇に、蛍の群れが舞い上がり、その光がそのまま星のようだった。いろんな思い出が、際限もなくあふれる。息もつけないくらい。

「ねえ」

「なに？」

「もう少し、このままでもいいんじゃないかしら？」

彼は困ったような顔をした。

「もう、決まった事だから」

そうね。もう、何度も何度も話し合った事だった。もう元には戻らない。

過ぎてしまった時間の流れには逆らえない。そして決まった事もまた変えられないのだ。

海へ行ったときは、タイヤが砂にとられて大変だったよね。雪の積もった冬には、タイヤを滑らせて遊んだりして、それも結構楽しかったよ。二人で買い物もよく行った。いっぱい荷物をつぱい私たちの部屋に運んだの。春、夏、秋、冬。そういうことのの一つ一つが、私たちを作っていったのよ。

車は静かにスピードを落とした。

「ここで、降りてくれないか」

私はうなずいて、ドアに手をかけた。

「ほんとにいいの？」

「もう、しかたない」

「……そうね」

私は車を降りた。雨の中、走り出す後姿を見送る。

さようなら。さようなら。日産 昭和63年製S13 シルビア。いろんな思い出を有り難う。

あなたはいい車だった。けれど、私たちには排ガスの規制からあなたを守ってあげられない。

シルビアはゆっくりと解体工場に入っていく。私の頬を濡らすのは、雨かしら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683a/>

遠い日の花火

2010年10月28日04時40分発行